明治四十年四月一日創刊　令和六年三月一日　通巻第一、四〇五号（毎月一回発行）

和歌新万葉

武島羽衣題簽

札幌興風会
会長　間島　誉史秀

北海道神宮献詠　三月兼題　「行く」

三月十一日ポプラ並木を見に行きぬ避難者二万九千人の報に
待ちわぶる春は来たれり円山の木木の緑も深くなりゆかむ
「従心」の教師となるにあと二年唱へて行かむ「雨ニモマケズ」
夜釣りに行く準備を終へると握り飯あたたかなるを妻わたしくれぬ
行く末のこれほど不安な選挙戦暴言の元と忘却の現
足早に追ひ抜き行きたる人人の背を眺めつつ老いを感じぬ
さまざまの想ひの込められ交はされる行つてきますと行つてらつしやい
淡雪の桜の木木を渡り行く春を告げゐる鶯（うぐひす）の鳴き声
心配を行きすぎるよと子に言はれ遠くから見守る心を押さへて
人生の終盤に来て親友と行き来をしての今の暮しよ
幼稚園のお手伝ひ表塗りゆく吾子冬休みに少しおにいさんになり

村田俊秋先生選

選者　村田俊秋
会長　間島誉史秀
天位　信田日裕
地位　片石辰弥
人位　小野勇人
秀逸　梶谷久寿美
秀逸　後藤優美子
秀逸　大桃小やゑ
佳調　小川紫織
佳調　室岡和子
佳調　遠田信之

吾子たちと修復をへたる熊本城と護國神社へ暑い日に参拝（令和五年五月二十七日）　八尾師　絹子

テラッテラの凍る道行く小刻みに足裏つけて膝やはらかく　櫻谷　るみ

今朝も行く雪の回廊口ずさみ足も軽やかすべらぬ朝よ　大潟　廣子

雪高く行くは難かしいにしへの行啓通り春の待たるる　楽間　直之

道もなき大雪原（だいせつげん）を踏み行くに空にこだます野鳥の声が（空知平野にて）　門前　和幸

流行の服が行き交ふ札幌で気後れしたるよ田舎住まひは　南　貴子

二人目の孫を授かり詣でに行く家族が増えたと感謝を申すべく　中島　正倫

ピザを手に老いたる友を訪ね行く妻先立ちて一人の家を　宮城　涼

雪深く行き交ふ細道譲りあひ笑顔の一声に寒さも薄らぐ　鎌田　憲子

春草のわづかに出づる土手のさま見むと春泥の道あゆみゆく　石川　弘子

雪の中電車に乗りて旭川へ声しか知らぬ知人に会ひに　岩間　亜有加

遠路行く重荷を負ひての例へあり米寿過ぐれどまだ道半ばなり　加藤　紀恵子

総評

天位（信田　日裕）

「従心」は七十歳。論語の為政篇に「七十而従二心所一レ欲不一レ踰レ矩」による。これと賢治の詩を詠みこんで、七十歳まであと二年だが、しっかり前を向き、正しい道に沿って生きる姿勢を示している作。

地位（片石　辰弥）

具体的に自分と妻の動きと心が見え、伝わってくる。作者の夜釣り行きを知っていた妻。頃を見計らってお握りを渡してくれたのだ。自分の好きなことに夢中？になる作者。理解してくれる妻。うらやましく、暖かい一首。

人位（小野　勇人）

台湾は終わったが、ロシア、米国、そして日本も。「暴言の元」即ち、元大統領トランプ氏と、忘れたような顔をして、ウクライナ侵攻を続けるプーチン氏。どこの国にあっても複雑怪奇な政治の世界。こう読んだのだが。

秀逸（梶谷久寿美）

老いはいろいろな時や場所で感じる。それが極く自然なことと思いつつ、示されるとそうかと諾ってしまう。足早に自分を追い越していった人の背を眺めつつ、老いを感じたというのである。「背を眺めつつ」に少しばかりの寂しさが見える。

秀逸（後藤優美子）

「行ってきます」「行ってらっしゃい」は、家族の間で交わされる言葉。これにさまざまの想いが込められていると述べる。親と子、夫婦、兄弟の間での動きや、やりとり。昨日のこと、ずっと以前のこと。その日、その日のこの言葉に込められているものを詠む。話し言葉が活きている。

秀逸（大桃小やゑ）

春の到来を鶯の鳴き声で感じとっているのだ。口笛のような短く、高い鳴き声。その瞬間に季節を捉えるのは、毎年、その声を聞いているからである。季節の推移に敏感なのだ。淡雪を背景に置いているのが活きている。

佳調（小川　紫織）

親心で、子にあれこれと心配していることを言ってしまう。子は言われなくてもと、返してくるのだ。気になることがあるのだがと思いつつ、それではと離れて見ているのだ。子を思うゆえの、複雑な心を詠む。

佳調（室岡　和子）

長い間の親友。この友の日常的な行き来。そうすることで、あれこれと情報を交換するのだ。「人生の終盤に来て」と述べるが、友とのつながりの中で元気をもらってください。しっかり者の作者。「終盤」がまだまだと、この一首は教えていますよ。

佳調（遠田　信之）

幼稚園から来ている「お手伝い表」。この表に吾子はクレヨンか何かで塗っているのだ。親として、あれこれを言う必要がなくなってきているのだ。手を貸してやりたいのだが「おにいさん」になっている子を、横から楽しく、うれしく見ているのだ。

札幌興風会　三月兼題㈠　「積　雪」

村田俊秋先生選

雪山をただひたすらに崩しゆく「春」の一字を捜さむ思ひに　天位　信田日裕

評　少しでも解かそうと雪山を、ひたすらに崩してゆく。それは雪山の中から「春」の一字を捜そうの思いからだと言う。うまい。拍手。かかる歌は初めて見た。あるいは、そのような言い方をするのにも出会ったことがない。春の一字、きっと見つけたに違いない。

積む雪より出でたる熊笹齧りたき私の中の何かが足りぬ　地位　大桃小やゑ

評　下の句に主題。生きてきて、様々のことに出会ったのだ。多くを得、己の中に取り入れてきた。十分なる生とも考えていた。さて、そうかな、と自分に問う。考える。「何かが足りぬ」と思う。確かな目で己を見つめていこう、の姿勢が見える。

ランドセル揺らし積もれる雪を蹴る歓声飛び交ふ東京の朝　人位　小野勇人

評　札幌では雪はご免願いたいの対象。それが東京では。降った朝の小学生の喜びよう。ランドセルを上下左右に揺らし、僅かの雪を蹴り合っている。声を上げて。うんとはしゃげと、自然に恵まれぬ都会っ子を励ましている作。

例年の三倍超ゆる積雪の増毛は今が漁最盛期　秀逸　後藤優美子

雪明かりに夕ぐれの部屋の影優し積雪の庭の立ちゐる木木の　秀逸　石川弘子

降り積もる雪の多さにとまどひぬ助けると友人あらはれうれし　秀逸　八尾師絹子

五センチの積雪と知りて飛び出しぬ雪かき楽しふるさと恋し　佳調　梶谷久寿美

父逝きし実家の前に積もる雪ずしりと重し春の近きか　佳調　南貴子

雪の中を帰るにわが家の駐車場のみ除雪されをり妻がしたるらむ　佳調　片石辰弥

積雪も吹雪も良しと長靴で詣でて後の茶屋の熱きコーヒー　鎌田憲子

如月に積もれる多く排雪を頼むにトラック一台となる　室岡和子

岩見沢のけふの積雪七十センチ短歌（うた）の友住むお元気ですか　櫻谷るみ

ドアを開け積雪を見てうんざりする歩みゆく細道付けるがやつと　加藤紀恵子

降り積もる雪の早朝は静かなり無音の中をひとり歩きゆく　岩間亜有加

近頃は吾子も手伝ふ雪かきよ今年は何回したかと問ふ妻　遠田信之

積雪の大平原に家ひとつ墨絵の様な音なき世界　窪田明美

寝る間際舞つてゐたのはにはか雪積雪は無く安堵する朝（雪かきは一仕事）　宮城涼

朝早く車道に歩道に積もりたる雪を運びゆく人人に感謝　大潟廣子

札幌興風会　三月兼題(二)　「胸（こころ）」　村田俊秋先生選

胸の内を見せぬ生徒も『蜘蛛の糸』に初めて一枚の感想を記す（名作鑑賞）　天位　信田日裕

評　大泥坊犍陀多の様々の悪事、一匹の蜘蛛を助けた良き事、地獄から己のみ助かろうとするエゴイズム等々。これらを描く作品に心を動かし書いた一枚の生徒の感想文。人間の複雑な胸のうちを綴っていたのであろう。それに頷くところからの作と言えよう。

打たずとも届けよ胸にと言葉探すZ世代でもない部下へ　地位　小野勇人

評　二十五歳以下の若い人たちを言うZ世代。米国の世代分類から来ている。マスメディア離れの人々。部下はその世代ではないのだが、作者より若い人なのである。伝えたいことがある。きつい言葉でないものをと気遣う作者。職場に於ける人間関係の微妙なるものを歌う。

末期ガンと語りくれたる胸の内言葉無きまま友の手を取る　人位　梶谷久寿美

評　きっと言うを抑えていた友なのであろう。末期ガンを告げたのである。これに言葉を失っての作者。黙って手をとるばかりであったのだ。よく伝わってくる作。友の心をしっかり受けとめているのだ。

奥底に沈めたるはずの胸の内歌と一緒にぽろりといでぬ　秀逸　後藤優美子

我が友の横顔に翳の見ゆれどもいかに尋ねむその胸の内を　秀逸　南貴子

献詠祭始まる太鼓の音ひびき胸まで伝はり身を律するなり　秀逸　鎌田憲子

橿原の神宮参拝心待ちにしてゐて八年ぶりなるうれし　佳調　八尾師絹子

この年はこころのかなし被災地に雛なき節句めぐり来てゐて　佳調　石川弘子

今でこそ一流を観たし聴きたしよ心清らに豊かに生きたし　佳調　重川啓子

お父さんと吾子は何回言つただらう帰り来てより離れずに居て　遠田信之

神宮の参拝終へて空あふぐ青空は高く澄みゆくこころ　大潟廣子

弟のこころの内はわからねど否定だけはせぬと見守るわれなり　岩間亜有加

映画見る我が胸より出でたる感動は血管を駆けて涙となりぬを　片石辰弥

見回せばこころ傷める事ばかりそれら見据へる勇気を探し　宮城涼

肩引いて胸を開けば深い呼吸とヨガの先生にこやかなれる　窪田明美

みぞれ中ペーパー山程ぶら下げてむこ歩み来る我が胸いつぱい　加藤紀恵子

立春に入院したる我を思ひ「こころ丈夫で」のお便りの有り　室岡和子

能登地震の映像流れ胸塞(ふさ)がる消さむと思ふされど消されず　櫻谷るみ

公園の木木に張られる雪のハート異国の旅人残してゆけり　大桃小やゑ

札幌興風会　二月兼題㈢　「雑　詠」

村田俊秋先生選

半生を暮らしし街を後にする引潮の地に別れを告げて（日本への転居）　天位　宮城　涼

誕生日を在らば幾つと指を折るに「父若きまま」と子は呟きぬ　地位　梶谷　久寿美

これだけのニュースを見ても税務署へ申告に行く日本国民　人位　後藤　優美子

パジャマのボタンひとつ取れたるそのままをやうやくに付ける大事（おほごと）せしごと　秀逸　櫻谷　るみ

大倉山の月に向かつてジャンプするレジェンド葛西が鳥になりゆく　秀逸　大桃　小やゑ

込められたる作家の思ひをその漢字にさがす楽しさ書店の片隅　秀逸　重川　啓子

同じ時刻違ふ雲見て胸をそるあの人思ふラジオ体操　佳調　小野　勇人

元旦に能登地震による死者多数頑張る人らに頭の下がる　佳調　八尾師　絹子

真夜中に三十九度の熱の吾子よりによつてか我が宿直の日に　佳調　遠田　信之

道彦の熱き思ひが声に乗り若人目覚める寒中禊（成人寒中禊にて）　窪田　明美

シャバシャバと明太子・餅の泳ぐ海土手を崩して「もんじや」をつつく　南　貴子

猫達とくらせる我はしあはせ者めぐりの人の御世話受けつつ　加藤　紀恵子

好きなことを好きなだけして生きたくもさうもゆかぬが現実なりて　岩間　亜有加

桜餅のその香りよく包みゐる柔らかき葉も共にはむなり　石川　弘子

鼻水の多く出るのは寒暖差アレルギーなるに始めてかかる（七度以上）　室岡　和子

吹雪く朝柴犬モモちやん雪のりこえ小さな体に喜びあふれる（毎朝散歩に御夫妻で）　大潟　廣子

会のたより

●二月二十日（火）十時、本殿にて旬祭並興風会献詠祭が斎行されました。その後、慶陽館二階あすなろの間にて十一時から歌会並びに勉強会を行いました。

【出席者】村田先生、間島会長、石川、大潟、大桃、鎌田、窪田、櫻谷、八尾師各会員、事務局の遠田、片石各権禰宜、岩間事務員の以上十二名。

●御誕生祝の短冊を贈呈

二月誕生者の新谷英子様、信田日裕様に御誕生祝の短冊を郵送致しました。茲にお祝い申し上げ、更なるご健勝を御祈念申し上げます。

●鎌田会員より御菓子を頂戴し、二月二十日の歌会で会員一同で頂きました。ありがとうございました。

●歌集『興風』掲載原稿について

現在、歌集の編纂を鋭意進めております。原稿の提出締切日は三月三十一日（日）となっております。未提出の方はお早めにお送りくださいますようご協力の程よろしくお願い致します。

●訂正

前号『和歌新万葉』におきまして、札幌興風会二月兼題「雑詠」の大桃会員の短歌に誤りがありましたので、ここに訂正いたします。

×花数あり→○花粉あり

（事務局・遠田）

「札幌興風会」入会のご案内

札幌興風会は、明治四十年（一九〇七）四月、当時の札幌神社（現北海道神宮）宮司の額賀大直の頃に始められた歌会で、札幌の短歌結社の草分け的存在であります。月例の歌会は北海道神宮頓宮や札幌市内の各所で催されていましたが、昭和五十年（一九七五）一月から北海道神宮社務所で催すこととなり、毎月二十日の旬祭にあわせて献詠祭を斎行し、引き続き月例の歌会を行っています。毎月会報『和歌新萬葉』を発行しています。

歴代の点者（ご指導頂いている先生）は、宮中御歌所参候、小杉榲邨を初代として、御歌所寄人の阪正臣、千葉胤明、遠山英一、鳥野幸次、武島羽衣また岡野弘彦といった方々が務め現在は十四代目の点者、村田俊秋先生にご指導賜っており、平成十九年四月に創立百年を迎えました。

毎月二十日の旬祭並びに献詠祭では秀歌三首を天・地・人位として大前に和歌を奉納し、記念に特製の短冊を贈呈しています。歌会また勉強会では、初心者にも分かりやすいように作品鑑賞、添削、指導を行っております。

現在の会員は四十名で、二十代から九十代の方までおります。どなたでも入会ができ見学も自由です。『古事記』『万葉集』の頃より続き日本人に愛されてきた伝統文化、短歌に興味のある方、作ってみたい方の入会を心よりお待ち致しております。

一、場所　札幌市中央区宮ヶ丘四七四
　　北海道神宮社務所
一、開催　毎月二十日
　　午前十時より旬祭並献詠祭（本殿）
　　午前十一時より歌会
　　（慶陽館・あすなろの間）
　　正午より短歌勉強会
　　（慶陽館・あすなろの間）
一、月会費　三千円（うち玉串料千円）
※初回の会費不要。出席されず詠草提出のみの方、遠方にお住まいの方、学生の方は応相談。
一、その他
①毎月二十日、本殿にて旬祭並興風会献詠祭が斎行され、天地人位の秀歌三首に選ばれた方に特製の短冊を差し上げています。また、その月に誕生日を迎える方にも別にお祝いの記念品を贈呈しています。
②毎月会報「和歌新萬葉」を発行し、会員の皆様からお寄せ頂きました短歌を掲載致します。定期的に歌集『興風』を発刊致します。
③遠方にお住まいの方も歓迎致します。出詠頂きました短歌を添削し会報と共に郵送致します。
④会員相互の親睦を図るため、新年会、観桜会、観楓会、忘年会等を開催しています。

お申し込み・お問い合わせ

札幌興風会事務局　TEL〇一一―六一一―〇二六一
担当　北海道神宮教化部　遠田（とおだ）

令和六年四月兼題

一、北海道神宮献詠　「溶く（溶ける）」
二、札幌興風会兼題　（一）「木」
　　〃　（二）「交差点」
　　〃　（三）「雑詠」

※締切り　三月二十五日（月）必着

三、明治神宮献詠　「耳」

※未発表歌厳守。締切は毎月十日ですのでご注意下さい。所定の様式にて各自の発送となります。

〒〇六四-八五〇五
札幌市中央区宮ヶ丘四七四番地 北海道神宮社務所内
札幌興風会事務局
電話　〇一一(六一一)〇二六一
発行人　間島誉史秀
編集人　遠田信之
印刷人　白馬堂印刷㈱